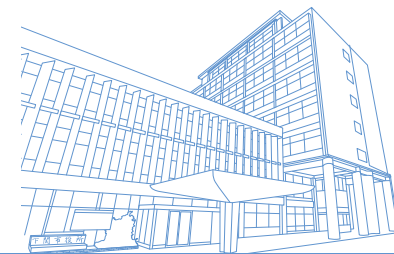


本庁舎の思い出(下関市立中央図書館長 安富 静夫)



本庁舎の所在地・南部町は、その昔、鍋城(南部城)があったことによります。この地域は戦国期から現在に至るまで赤間関(下関)の行政の中心地で、毛利氏が鍋(南部)城を改修し、赤間関代官を置いていました。江戸時代に鍋城が一国一城令で破却されたのちは、城跡は城山と呼ばれ、その麓に長府藩が赤間関支配のための御用所(関在番役所)を設置し、関在番という役人を派遣していました。市駐車場の西、街路に建つ「赤間関在番役所跡」の石碑が、それを物語っています。

明治時代になると、在番役所跡には第十五大区会議所(県内を21の大区にくわけされた一つ)、次に赤間関区役所と進展し、明治22年(1889)4月1日、全国に市町村制が施行されると、31の市制が施行されました。その31市の一つとして、赤間関市が誕生し、赤間関市庁舎が設置されました。その後、明治35年(1902)6月1日、赤間関市から下関市と、市の名称が変更され、下関市庁舎となったのが、現庁舎の存在する由縁です。

市庁舎は立派な建物がありましたが、昭和12年(1937)12月18日、火災で焼失。その際、鉄筋コンクリートでの再建が計画されたものの、日華事変のため中止となり、木造の仮庁舎が建設されていました。

ところが、昭和20年(1945)6月29日と7月2日、関門海峡沿いの市街地は、第二次世界大戦の戦災で焦土と化してしまいました。市庁舎は、7月2日に被災し再び焼失しました。市役所に勤めた先輩は、このときを思い出し、「戸籍謄本を地下の倉庫に運んだものです」と話してくれたことがあります。

こうして、市庁舎は、一時的に現在の王江小学校に仮移転、昭和21年(1946)12月1日、旧74部隊の兵舎、現在の社会福祉センターの一角、貴船町3丁目4-1に移りました。このような経緯を経て、昭和30年(1955)、新庁舎が完成し、戦国時代からの由縁の地に、再びその場所を得たこととなります。

設計は、全国から応募された143点から審査され、東京都の田中誠さんが1等入選と決定されました。

着工は昭和28年(1953)11月17日で、西日本でも立派な鉄筋8階建ての庁舎が、およそ1年3カ月後の昭和30年(1955)2月10日、福田泰三市長のテープカットで開庁しています。

私と本庁舎の思い出は、現在とは違いますが、4階の出納室・8階の監査委員事務局・2階の福祉事務所・5階の広報広聴課に勤務したことです。美術館や図書館など本庁舎外の勤務を除くと、合計26年間を本庁舎で過ごしています。眺望の良かったのは、8階・監査委員事務局からの眺めです。関門海峡の潮の流れ、行き交う船、門司の山並、変わる季節の移ろいは、素晴らしいものでした。屋上に出ることもでき、海峡の風を大きく吸ったものです。あるかぼーとの海響館・観覧車はなく、埋め立て前は海が広がっていました。もちろん関門橋の姿もありませんでした。

本庁舎内での思い出は、広報広聴課で通算14年間を過ごしたことです。ここからの眺めは、山手側ですから、東蓮寺の墓地を眺めていたこととなります。しかし、現在は、駐車場の建物で風景はささげられています。しかし、井川克巳市長に続く5人の市長に接し、隣の市政記者クラブの部屋では、朝日新聞ほか12社の多彩な記者の皆さんとの交流に幸せな日々を過ごしました。ある記者は、皇太子殿下の学友で、皇太子殿下直筆の年賀状を見せてあげる、と声をかけてくれるなど、楽しい職場でした。

現在でもなお思い出されるのは、木製のフローリングであるために、一歩、一歩の足音が違うことでした。

この稿を書くために、先日、その音色を確かめるために久し振りに訪れました。なんと、昔のままの音で迎えてくれました。材質は、建設に携わった方にお聞きすると、ケヤキ・ナラ・カシのいずれか、とのことでした。その材料を、30平方メートル四方の広さに、4枚の短冊型の板がはめ込まれているのです。庁舎全体で、何万枚が敷き詰められているのだろうか、と思ったものです。この板こそ、新築以来63年間の市政を知っていることとなります。

時は移ろい、市政も大きく展開しました。しかし、何年経過しても、その礎は変わらないものです。数年後、庁舎の姿が変貌しても、内部で働いているみなさん、そして、市政の発展を願う市民の願いに変わりはありません。たゆまない市政が生まれ変わる庁舎に引き継がれ、発展することを願ってやみません。